

## 「頑張ら」ない



野村アセットマネジメント社長 中川 順子  
なかがわ じゅんこ

社会人になって5年が経過したころ。東京での社会人生活は長くなりつつあったが、新卒採用などの人事部の仕事から投資銀行の仕事に異動、プライベートでは別居状態の結婚が同居となった直後で、公私ともに環境変化の時期だった。

新婚生活には負担がなかったものの、仕事は全く未知の領域。職場での会話が日本語なのに意味がわからない状況に驚愕。参考書で見たことのある単語に「食らいつく」しかなく、また、上席や先輩の机の証券六法とそれが日常使いされている様子に、気後れどころか気が遠くなつた。その業での独り立ちへの道程があまりに遠く感じられたからだ。

職場環境はよかつた。年の近い先輩は何かと気にかけてくれた。先輩はすでにその領域で勉強を重ねており、温かさとともに経験や知識で助けてくれた。それに、密かに愚痴を聞いてくれる(実際は聞き流し)同期もいた。

そのようななかで、自身は、キャリアを積み上げられる確信は持てず、手探りでトンネルのなかを歩く感じだった。たまに少し明かりが?!と思うと、それが蜃気楼のように遠のく、そんなことが短期間に何度もあった。同僚や先輩と同じことをしようにも、なにせ時間がかかる。当時のIT環境は、社内電子メールが設定されパソコンも1人1台に、が整い始めたころで、まだファックスが多用されていた時代。今のように、自宅からちよつと連絡を、や、出先から軽く電話連絡を、に

なるのに、あと数年という時期だった。そもそも仕事に時間がかかる私は会社にいる時間も長くなるが、残業に定めがあり、また焦る仕事したいのにと。

そんなとき、上司からこの一言を受けたのだった。

「頑張るな」

優しい?とその瞬間思ったが、見事に違つた。

「成果と頑張りとは、比例しない」

「お客様に良いものを、に、頑張りはいらない。」

成果主義を説くのと違う。頑張っても無駄だ、というのでもない。シンプルに言えば、言い訳をしない、他人のせいにならない、と解した。その人は、大きな仕事舞い込む人だったが、どんなに難しい場面でもひょうひょうとしていて、肩書経歴で人を区別しない人、私にはそう見えていた。

当時若輩の私は、これを厳しい教えとすべき言葉だったろうが、落ち込むより、その人の言葉だからか、その言葉に、とてもすつきりと気分が変わつたのを覚えている。この考えだと、私はこんなに頑張つたのになんか加えて、ガタイブな気持ちになることはない。加えて、時間を費やすことは重要でないのだと思つた。昨今の世の流れに、最近では感染症拡大防止対策が加わり、働き方に大きな変化が起こる。絶妙なタイミングでの心に残る短いメッセージだった、それを最近また思い出した。